俳諧すみたはら　全

へ 5
4311

へ 5
4311
門 へ 5
號 4311
巻
故 横山有策氏
昭和四年五月
寄贈

炭俵序

此集を撰める孤屋野坡利牛らハ常に芭蕉乃軒にゆき
かよひ瓦乃窓をひらき心の泉をくミて十とせあまりか
乃文字の跡風をたすけあへる事や宗祇の流の行衛
おほせる秋この二三子庵に侍りて火桶によりし炭をおこし
菴主これに口号はしけ宋人の手を亀らすといへる葉を見
なりしと去の竹筒に嬉のさゝやなのりをきゝ情に
華として金屋乃雲の古さまに銭と香あつまりひ
いつる聲乃をりから耳に入たるもかゝるその奇實乃め
とりの是に撰のすりかやこれを炭俵と書る名の白
乃ゝつと出しより秋の月まろしらかさぬけいや今後に
集なりて音にのあちの二十日あまりわ旅と成人見をひろ

きこえよミ炭俵乃絲をあやまつり　わきまへハ又くぬき炭
の筋みえるいろゝしく歌も　さく付侍るなハ
詩乃正義にいへる五ツ乃しなの外をもはなれ
ちひまハいつしれと例の口に何せるあやかく薦より
示ありつゝもよいしより芭蕉旅行乃こと達
やつかれ筆を採りて再旅乃頭を結ひて此集乃の
るに及ひてもの乃みかくし乃秋まとしあち桶乃あかりにぬき
炭乃鳴る音をうちあましつるうちに炭俵にしとりきく
ハ挑せかりと枕ごちならは小子此集をとりてよしと観れ
うちよせてや此集をえてし婦と成りこの句をそ実引
序とすでたと持て待りてなるやかよるる入甚が右
絵かてに點をいのつかひ有けりそへに筆をとつる谷ハ

わかしものしところちを洗くむ

元禄七乃年夏閏さつき初三乃日　素龍書

むめがゝにのつと日乃出る山路かな　芭蕉

処々に雉子乃啼たつ　野坡

家普請を春のてすきにとり付て　野坡

上乃たよりにあがる米乃直　芭蕉

宵乃内はらはらとせし月の雲　仝

藪越はなすあきのさびしき　野坡

御頭へ菊もらはるゝめいわくさ　野坡

娘を堅う人にあはせぬ　芭蕉

奈良がよひおなじつらなる細基手　野坡

ことしは雨のふらぬ六月　芭蕉

預けたるみそとりにやる向河岸　野坡

ひたといひ出すお袋乃事　芭蕉

終宵尼の持病を押へける　野坡

こんにやくばかりのこる名月　芭蕉

はつ雁に乗懸下地敷て見る　野坡

露を相手に居合ひとぬき　芭蕉

町衆乃つらりと酔て花乃陰　野坡

門で押るゝ壬生乃念仏　芭蕉

東風々に糞乃いきれを吹まはし　仝

たゞ居るまゝに肱わづらふ　野坡

江戸乃左右むかひ乃亭主登られて　芭蕉
こちにもいれてからする臼　野坡
方々に十夜乃内乃かねの音　芭蕉
桐の木高く月さゆる也　野坡
門しめてだまつて寐たる面白さ　芭蕉
ひらふた金て表かへする　野坡
はつ午に女房乃おやこ振舞て　芭蕉
又このはるも済ぬ牢人　野坡
法印乃湯治を送る花ざかり　芭蕉
なは手を下りて青麦の出来　野坡
どの家も東の方に窓をあけ　野坡
魚に喰あくはま乃雑水　芭蕉

千どり啼一夜〳〵に寒うなり　野坡
未進乃高乃果てぬ算用　芭蕉
隣へも知らせず嫁をつれて来て　野坡
屏風の陰にみゆる菓子盆　芭蕉

三吟

兼好も莚織けり花ざかり　嵐雪
あざみや苣に雀鮨もる　利牛
片道は春の小坂のかたまりて　野坡
外をざまくに圍ふ相撲場　嵐雪
細〳〵と朔日ころの宵乃月　利牛
干稲も焼米おせん出る　野坡

ウ泥染を長き流にのばすらん　嵐雪
あちこちすれて昼まへうつ　利牛
隣へもしらせず嫁をつれて来て　野坡
てらくしくも寒さるゝのかゝり　嵐雪
思谷のみちハ聖護院　野坡
五百のかけを二度に取けり　利牛
綱ぬきれいゞの紐ある宮の人　嵐雪
人のさりし後書出思ふまゝなり　利牛
新役の鍬を下せし田の上にて　野坡
飯米中なる羊を放る月　嵐雪
渺と雨降やみて秋の風　利牛
錦れみてハ又斬ゆく　野坡

名妻云乃ぬるしま郭よ墨ぬりて　嵐雪
抱揚る子の小袖をきする　利牛
くりくりと河内の若狭送り鍬　野坡
心みるまし箸乃しん多く　嵐雪
婿うけ来く娘の世をも語らう　利牛
こまし乃なれハ何も暖りぬ　野坡
手綿の細よ清ミさとすまん　嵐雪
叶ふれハの小倉こふまる　利牛
黍の穂ハ跡しれ風よ吹倒し　野坡
馬場乃喧嘩の経すむ月　嵐雪
老ハとうし遅て人に来る　利牛
今年鷹や茶くちりほとらん　野坡

ウ
売手もうらつて買手待たる文紙　沾者
はらりしと雪のふり出し　利牛
鎌倉の役きされ遣らるる　野坡
うしろまで文の志れぬ細引　孤屋
独ある姉をすゝめて妾の什　利牛
まさらひ残る有明の縁　野坡

ふか川にまかりて

空豆の花さきにけり麦の縁　孤屋
昼の水鶏のはしる溝川　芭蕉
上張を通さぬほどの雨降て　岱水
そつと覗けば酒の最中　利牛
寝所に誰もねて居ぬ宵の月　芭蕉
どたりと塀のころぶ秋風　孤屋
きりぎりす薪の下より鳴出して　利牛
晩の仕事の工夫するなり　岱水
妹をよい所から貰はるる　孤屋
僧都のもとへまづ文をやる　芭蕉
風細う夜明烏の啼わたり　岱水
家のながれた跡を見に行　利牛
鯲汁わかい者よりよくなりて　芭蕉
茶の買置をさげて売出す　孤屋
この春も盧同が男居なりにて　利牛
よれし柳改今年みしりて　岱水

雪乃跡吹はがしたる朧月　孤屋
ふとん丸げてものおもひ居る　芭蕉
不届な隣と中のわるかりし　岱水
わりもち鍋をよくあらひけれ　利牛
涼しさに大ひさしある新屋敷　芭蕉
呈つけたるかけを組ぬる　孤屋
衣のやうにまくらんでねれ汗を拭　利牛
客を送りて提る燭其屋　岱水
今のまに雪の厚さをさしてみる　孤屋
年貢すんだとほめられにけり　芭蕉
息災な祖父のしらがのめでたさよ　岱水
堪忍ならぬ七夕の照り　利牛

名月のまに合せたき芋畑　芭蕉
けしくりて茶よ茶麩　孤屋
てのころき宮の酒もらひきて　利牛
山乃根際乃松かれにけり　岱水
よこ雲ふりよく風の吹出し　孤屋
晒乃よさ白くなりける哉　利牛
衣つむりて女子えらりのつまぞそ　芭蕉
余乃かさなりし萱ぶき屋て　岱水

芭蕉　孤屋　岱水　利牛
各九句

百韻

子を裸又とて還るく早苗舟　利牛
岸のいばらの真白さく　野坡
雨あがり珠数懸鳩の鳴出て　孤屋
与力町よりむかふ西かぜ　利牛
竿竹に茶色乃紬たぐりかけ　野坡
こちら鄰れてやかましく人あつ文　孤屋
菜乃身干菜乃茎汁かろくは　利牛
掃てく迄つゞく檀ちるらし　野坡
ウ
ちゞめさへ代中てうり出程ほあり　孤屋
坊主になれとやかり仁半れ　利牛
松坂や矢川へ入も通りて　野坡
吹あげし勝もつゝき関乃鮫　孤屋

十二三弁乃言葉の寺をならひ　利牛
本堂はしはまだ足らずらし　野坡
日乃あたる方はあからむ竹乃色　孤屋
只奇麗なりすくなし　利牛
近江路乃うしろ頭をならべて　野坡
天気乃桐よ三ケ月乃照　孤屋
難なかりし重ね着むかひして読　利牛
椋の実落る屋根くさるらし　野坡
本妻乃房を連立寒九なり　孤屋
流氣作ろの人気をすくなく　利牛
ほかしと二る魚乃いはひ出　野坡
ほろくして河への縁にこぼるゝ　孤屋

ない袖をふりて見せけり恋ごゝろ　利牛
舞羽の糸もそれつくし繰　野坡
浪しは西武士の茶のつとひ　孤屋
尚おれより今日ハ大野　利牛
切蠅の咎倦しも権九郎　野坡
くもり納豆を仕込廣庭　孤屋
燵日和やすさしうきを待ころ　利牛
若てまけるお能の重さき　野坡
つまさあれの名をさへ呼す　孤屋
よかりの霜出る寺の本　利牛
あれの身様は貢出る古柱　野坡
すゑきおもてあきることて尻　孤屋

ひつそりと盆は過たる浄土寺　利牛
戸でからくみし水風呂の中　野坡
伐透す椴と檜のすれあひて　孤屋
赤ひ小宮はあたらしき内　利牛
濱迄ハ宿の男も荷をかゝえ　野坡
師走比丘尼の諷の寒さよ　孤屋
餅搗比隙を盗し賣をそへ　利牛
天満の状を又届けり　野坡
廣袖をうへにひつぱる船の宿　孤屋
むく起にして参る観音　利牛
焚さする薪を尻で推込て　野坡
十日又忠乃ふすまはしすゑ　孤屋

三

舟荒にかきさけたげ棒の緒えくり　利牛
弦打颪海雲しら浜樽　孤屋
機嫌能かいこハ庭に起かゝり　野坡
小豆売らう乃宅静し　利牛
橘端に勝る気をなげ出て　孤屋
網乃鯵うけを急ぐ夕　野坡
麦畑の殺地に濡る傍杭　利牛
売人にも志つん新殿の年　孤屋
指毎もよ梢にもちれたかぬ　野坡
又此扇の古茶いゝしくて　利牛
妓まるさへ上手二竿能　孤屋
冬空たんゝうく帰しおり　野坡

荒雲乃こまかき袖を濡らし　利牛
一つ宛りに錦乃雲猫　孤屋
渋行に蔵川ちらす鮎乃舟　野坡
なめすゝむる寒紅乃塚あいひ　利牛
めを縫く無理に喧ける騎の妻　孤屋
又なのみして若へ溜たかりまく　野坡
かきまわし中の乙片目をきつゝるら　利牛
入来る人に喰ゐら煎茶を新し　孤屋
やうちうめに朱綱縮乃針田川　野坡
肉菜屋乃みゆる寝乃ふちさき　利牛
ほそりときんとほく中雲ちぎれ　孤屋
あり茶に餘ましき嘸汁　野坡

茶の門に越て居る桜京　利牛
風流にはなしにほよく　孤屋
おちくぼむ時乃苫の音　野坡
入舟つく内乃六内　利牛
拭ふとも上の姿居ひとける　孤屋
当まつのる綱ゆうりつひ　野坡
名
大霜乃ありけし畑乃かのけて　利牛
何年菩提しらぬ杉乃木　孤屋
妻さへ同心乃身をも嫁　野坡
丸九十日湿をかりらよ　利牛
投出もさくまくにめつさし　孤屋
足むかし　葵少盤より借く出る　野坡

里離れ紙引乃あたりつゞく　利牛
やうくかのるる嶽の禅りと　孤屋
せまりける朔日志の精進者　野坡
りんちる聖ちる八ヶ寺　利牛
下嘗の仙甚儀乃后りより　孤屋
折仮を添て土をまちる簱　野坡
女房は監帯の糸かへしまつ　利牛
白てあゆる鮭乃やきりの　孤屋
世先を今年古風の欲あも　野坡
まつ和仕事もなしの知まく　利牛
男帯の針数をとうきんう　孤屋
妻角ふりて二ゆる遠坂　野坡

峨りぬ紙漉屋乃世乃春なりし　利牛

門建らん町乃桐油　孤屋

彼岸玉子乃花の咲く　野坡

乙人たらうかれて暮え　乾宇

春之部　歳旦

子丈

歳旦や汐路乃初汐　菅葉

高砂や春の松　溜子

みちのく關の海　枚風

其や丹波吾妻も　玄来

かさね傳へ　浪花　正秀

いそがしき雀乃かきまはし　大坂　酒堂

蒼つや垣の棒　依水

桜いまさ門情誘れ　沾圃

月下に乃詞や年　孤屋

初日影堂も　利牛

も松ら親の家　野坡

梅

梅一木つましうな　素沾

むめ咲や向乃桜木の　曲翠

むめがまるみ　支考

むめちるや先日乃白　伊賀　土芳

梅咲て湯殿の崩をなをしけり　利牛

赤みその口を明けりむめの花　游刀

みぞこしに咲かゝりてや梅乃花　野坡

紅梅は娘すまする妻戸哉　杉風

我かこゝろ乃七くさを売れをきゝて

とくさまて[illegible]白髪つる若菜かれ　其角

七くさや粧ひしかけて切刻み　野坡

うちむれて若菜摘女の腰ゆかし　仙杖

後まつり乃文をみて

繊月一足てもゆく[illegible]かな　玄来

大そらや蝶乃出まとふ繊月　信 杜支

おもふ月[illegible]かな　仙花

折くへる桜てふくや台所　孤屋

[illegible]白魚くて[illegible]　野坡

倉乃附みなあつまるや出きる　仝

上巳

常あれ川乃なかれを汐干かな　沾徳

[illegible]や[illegible]の桃の花　桃隣

うつくしきの[illegible]いつれか[illegible]の雛　其角

畏乃手に條もまするもひなの家　如行

日半路をてられて来るや桃の花　野坡

麻の種毎年踏て桃の花　利牛

藪垣やこゝ乃皃かくしもゝの花　孤屋

青柳乃泥にしだるゝ汐干かな　芭蕉

鵜つかひは命あてなむ小あゆ哉　　廿五田夫　敬首

まゝ鳥や樟の葉つゝむぬれぬの濁　　芭蕉

咲ながらつゝしの葉や二三本　　子珊

ほとゝぎすとゞみ坂門のつきあかり　　伴雲　怒誰

白のけやけの陽や風の末　　横雛

さみだれやきよきまさ家の麦の露かな　　仙華

旅行して

法度場を旅より内はすゞしさよ　　路通

此集いまだ半なるに孤屋旅立
て行りける雨川やそみ送りく

雲霧をさしても春しる人の　　野坡

掛さして帰さ身をきりぬ　　利牛

これけ山乃力及ばぬあつさ哉　　横雛

するが地や花橘も茶の匂ひ　　芭蕉
此句は嶋田より状にて

五月雨

はきよれやしとおりく島も九太橋　　喜然

五さ月雨の色やよど川大和川　　桃隣

さみだれに小鮒をにぎる手ありけり　　野坡

五月雨や家のぐるりにさげ薦（やゝゆすり）　　嵐蘭

この雨は桃隣がとまりし夜
五月雨や龍もすくなき家のうち　　岱水

涼

川中の根木によりそふ涼哉　　芭蕉

有影まうそく夏出や新茶より　丁甫

涼しさハ蝶もおこらぬ竹の枝　卯七

乃かどもいひくるするすそぶ　探芝

路風をすくれて涼しさ夜は大影り　智月

すゞしさに寄れる枕の竹下水　几峯

すゞしさや洲の上汎げてくる人　玄来

夕まぐれ出来る涼さ石よの割りかり　也坡

三ヶ月の影又して涼む哉　素堂

暑しらす

橋や宴家机乃あり所　杉風

屋尻おもしや破障子しき綿きく　正秀

世の中や鳥負畠の夕祇花　里東

まつ風や弟子うしやる手網　素堂

附る帰りし風が雫なる　利牛

子規鳴の出されぬ格子戸　也坡

麦

橘ちる麦積いやしや紙どり　この荊口

麦乃穂とちなりくや筑波山　千川

麦飯の田植や夏な蛍とる　許六

翁乃糂りを川さきまで送りて

刈てみし麦乃白ひや翁の内　利牛

おなし附年

麦畑や出ぬけても行麦の中　也坡

おなしくころ坡

浦風やむらがる蠅のはなれぎは　岱水

端午

五月雨や傘に付たる小人形　其角

さゝ嫁鉾みそやはつお風の色　大坂 洒堂

五月ゆくねすまみるあやめかな　桃隣

文もなく口上もなし粽五把　嵐雪

みをのやを首の骨きる田赤蜂　仙花

帷子のまてきぬき鯛る袷かな　素龍

夏籠

薫をみのゝて町のはつきかな　卧高

枯葉ずゞ気高まあつし尽れかな　斜嶺

二三枚笠もあつさかな　長崎 魯町

ちいさ山乃かゝ夜そぬあつさかな　猿雖

するが地や花たち花も茶の匂ひ　芭蕉
此句は嶋田より此便り

五月雨

はきまれやしと船人舟ゝ九右稽　素龍

五月雨の夕やまとく川大和川　桃隣

さみだれは小鮒をやきてぎりかな　野坡

五月雨や家のまはりの薯蕷（ヤマユホウ）　嵐蘭

この句は桃隣よりおくられ

五月雨や龍もさかるゝ身のゆかり　成秀

涼

川中の根木によろふ涼かな　芭蕉

月影にうごく夏木や葉の光り　丁角

涼しさよ塀にまたがる竹の枝　卯七

の旅をと云ひそゝくするすてぶ　探芝

[illegible]涼し　智月

すゞしさを志れし椎の木下陰　几峯

すしらや深川の上げて[illegible]　去来

夕まてゝ家さ石橋のありけり　野坡

三ヶ月の隠にしてすむ[illegible]　素並

題しらず

橘や定家机のありどころ　杉風

麦ぬかや破簾すゞしき椽の先　正秀

壁のうちや[illegible]の代々　里東

早乙女にかくしてとらする葉飯かな　嵐雪

山吹も巴も出る田植かな　許六

ひるかほや雨降たらぬ花の㒵　智月

たけのこや人もすゝあぬ生くろみ　木組

蛸のめをさまさせよまつ乃笛　乙州

雨乞の雨気こはがるかり着哉　丈州

早乙女みしる乃夕やみ乃夢　仙花

一いきれ蝶もうごかぬ暑かな　楚舟

あつき日や蓮の葉南　残香

猪の床にも入るやきりぎりす　乃有

囲爰へ伝町乃あつさ哉　岱凡

けふとても八幡の栖や雲の峯　祐甫

一枚とすけふも竹のわかれかな　仙花

竹乃葉や涼しき葉乃さへづり　嵐雪

さるつき人僕は酒を打むるを加く戒めの心をそへて深切しむ志るしにあるを見て

それぞれよく気をつけあしき所ありとて名あるかぎりを見出ておもしかれ

ひとり汗をかきまく

汝も酒よ名乃つくあつさかな　利牛

ある人の別荘にゆきて遊び暑を避る日

て物すさりし千句のことを打ち出で

竹雲と我とあるみなや夜の秀逸　此坂

秋之部

名月　秋のもなかは月のおもしろき月を称して作の数となせり

名月や人つめても去ぬ萩一よき　澂子

草の庵操もなうて泰の虚　玄采

家買てことしも見る月見かな　荷兮

名月や雁の竿続く露の橋　西堂

秋陰や出船揚子江の月見　墨東

すゞ乃橋乃ひくさに出る月　利牛

夜も更て雲も晴ゆく水の月　甚甫

むさしの仲秋の月を見て

望峯ノ不盡筑波を

名月や不二つくばとする所　素社

七夕

笹の葉に梶付てや はしらさく　其角

星合を見てこそ 君やかやの縁　頑尼

七夕や ふりかわりゆく あまの川　宗之

盂蘭盆

うき世のまゝ分て 新しやまゆり　洒堂

踊るべき所で 書附さる 寺　李由

盆の月ねぐらと門をさゝぎけり　破披

胡鬼

因関

胡鬼や 王を 從世の門の極　芭蕉

胡鬼や日 傭出て 佐の極　利合

しら糸に 鮎も 釣れ 柳かな　如春

秋虫

手にとれば 鳴くはうき き らう 虫　大津 野月

悔いや 人のとまれや 虫のこゑ　文山

蛙 鳴き りんが 落る 鳴き ずさ　さら 加右

こうろぎや 竹を 手て 退る 猶の上　孤屋

恋

友恋の 帰るを 見て 尋ね 恋の上　東木

人の身に なまよりて

恋の夜や 硯の 邪恒 秋　去来

旅行の 手紙

逃げ 行 迄 や すまさ 嫁 恋の 春　土芳

草花

宮城野乃萩や更科の秋の花　桃隣

萩すゝきさゝらしくちらや村すゝめ　野童

戸隠乃萩や刈おく嵯峨の端　猿雖

芦乃葉や良桔梗葛ころ
　あさまえ隣まく　丈艸

芦乃花ま箸よりいりの笑の据　玄来

　山中の草花をみて

草花や鼻のさえあるかゝさ　其角

園菊

菊畑ありくあまる旁れゆりの代　杉風

猶菊も冬子咲出九月の花　桃隣

秋植物

桔梗のあふるむをとゝるもの女郎花　利牛

落露や谷まなかるゝ籠の甲　諸南

秋風や芥子乃根のあらはるゝ　木白

算まく手まく寮まいりまく帰の秋　孤屋

そらくもしの名さ南蛮よりくるは
これの浜南えんまくひさし追ゆくや
未詳あらつき天のそきろしえ八ゆまり
あくせるハそのあさちをそのやるへきの
わくあまひく針さるあるへしく緑やさし
くしぬ名月ハ池るむや紅葉乃えまくあれハ
天資良生の現さしくし恒むへくれ

兼ゝくるや石臺まのせらるく竹椒
のえしのくさまあるハ上て几帳をとすれ
すりたちのつれそとあけのつくて去られて
やけ乃そつれ二階のつま朝わしのひらけを
よのなる家とあやまくみそ侍るを旅宿の
えこゆきさゆくひてハされなく扨りなむと今ハ
くる髭つり鬚のそよとゝ動くなりつれ
てひんやぼ樹の足をとらへもみきなるとあり
倉ゝ雲葉乃とき～る見出されて殺ハ
夜ごと豆穀乃味紅葉乃色をみするを
菊雲の頂上をせうらくハ世ゝとある人
此ゆりくその隙きりくみちの乃都かの

小高き所に一きられて あんちよくど
ひろみの乃しを西方せしものとハ
やしあらなき子もあれ志りしいまハ今の
人くも昨夜とさりつれそらめく庭をも
よのむへりしれらしきぬもみなとへりけと
小序を志るらん

石臺を移りけ根こきや唐辛 丹坡
お襟取合し蛤や秋の名残き 山風舎
そよ風の名もしや葉末の露の程 文草
蝶ひとりよき漆袍乃白ひ糸 酒堂
秋のられいよくなるめる八 蘇ツ

葦荻や荻ゟ草も見へハ紫し良　利合
久良のけハ秋し紛ゆかしふ　支考
くら秋を風しりてゆかりけり　小枝
秋風を憐や南家き池の上　傍信之
庵了乃所純らし月乃雪　其角

冬之部

初冬

風や沖うりきむき山のきれ　其角
市中や未ね草も茂れし風　桃隣
冬枯乃磯に今朝見る小鳥八　芭蕉
樅木や荻後まで見えて冬ごもり　支梁
旅の菜乃きれめ冬や小松原　斜嵐

川菱の結乃あわ衣　翔安
風の薮によく寄る小家かな　沐香
和尚や猫乃毛も立竃かな　雙舟
凩や髭あけき猫乃面　八条
冬ごもり子語て
木枯れ根もさえ行松原かな　桃隣
笹帰月よ霜乃鞍後乃さむさかな　游刀

時雨

芋畑乃後へちらしり初時雨　菊臼
旦くり沖の時雨れりそこく
芭蕉翁をとむらふ花むかしそて　夫り
もしほやかしと吹つけき時雨よ葉の庵　斜嵐

七月とおもへは旅しつかなまだ　許六
雑ねのころ
小松原とおりの御を扱やそぬ　也故
大根引とりへてを
鞍壺に小坊主乗るや大根引　芭蕉
沖喜をとしれんとあ氣て大根引　也被
秋近世帯らう霜月の古大根　洒堂
はむさかたの方でまて
人参のあまさをとるさむさ八　也波
この花さく扱扱もはむさ引　示峰
蕪まき切まく扱拗もあきさきさ八　利牛

足からしきつるくて立つ其の月　我眉
奥床や落ちらち上る名乃月　里東
太の三月ちなん川の広くをつれけ
他国より秋のかしまおつるきて
今まきよ廿し方

雪

はつ雪と寄りと影てあなり　世故
初雪の尺ほどやさるの鼻ちら　利牛
そり雪や猿の山崩之の藁も上　買山
雪の日よ居脩を　鵜鶏　依く
雪乃日やさむくすやくりかさ柏　猿雖
そての雪紐乃季さく

杉のそれ玉を綴し散の露路　支考

朱比鞍や僧舟人わたりの雪見韵　小枝

まつ雪や生る風をも消えけり　許六

岸黄昏比横町さゝる雲見人外　汐夕

海山乃みる倚きる雲便ふ移　乙州

江の舟や曲突子てふる言の路箸　吉鉄

鄙ふり

芽しさに絹よ打ち込枝冊ふ能　羽黒大呂丸

友ふ菊や杉樺のうる紅の鴻　菖蓬

禅門乃華白袋村ふ人十夜　許六

凡や錢乃盆ねそる家村ゝん　智月

白魚の売ふ先白比や杉の箸　之道

楮の火やあらつき方代あ玄人　丈艸

庚申やてゝと尺雉乃なる雪殺　珍香

泊ら能の縁既すんつゝし神楽　其角

海へ降し宮鞍や雪ふ波の高　仝

すゝしさき

嫁まくさゝ己が棚つる大土ヶ家　芭蕉

旅様しをしとくい代ふ能　万平

餅つきや元旦させる筆硯気　野坡

山卧の又まもま咄帰を外　嵐雪

侍まちや氷にすゝしちの行て　智月

茶蕎

うのふれも又らす恋しけり峯　杉風

そうきへぬ筆又もつ年の暮　李由

あしらせく鴬一羽としの暮　智月

網かさ乃けふもしさよ年の暮　孤屋

うしの寝を覚てしらぬ猿かな　猿雖

年乃くれふところをさき縫はじめ　野坡

芭蕉いふもの無くりくれ乃年

いつたまも見しらぬ乃なりま

何ろ多くに心やすしや年のくれ　素龍

行年よ京へと二升の堺ひもの　[illegible]

誹諧秋之部

秋乃夜庵こめ移ふ離れより　其角

おくれてく一羽淋しき鶴　孤屋

鉄鍋まで日傭数ふ見やくく　仝

内の障子に月の門　其角

槇の葉も手の火桶も落まえる　仝

つもひ原やま鶴をうるそれ　孤屋

下京は夜路乃峯寿般さすれて　仝

娘主乃鳥場ふ装ハおかうしむ　其角

足駄殺せる尻して飛ぶハつねり　孤屋

鳥喰ふくまで霍乱乃針　其角

田乃畔に早苗把く投て置　孤屋

原本のなえむ酒盛乃座　其角

火燵乃引出しさへちらし散　孤屋
誰か袖そくくしね乃肩　甚角
拾縄に鮭乃さつれハひかれく　孤屋
鳫れ下る深淺にかゝるして　千角
男とも乃穢津桂乃花乃あら　孤屋
むかしの子ありさのうせて乞　千角
いさん路をきくおつらひ之　仝
客乃病乃あらしき内　孤屋
夏草おふしきさくれをむり　千角
あかさとのへも小僧のやゝうき　孤屋
手の言意樽乃積も落ちりて　千角
常とさとおさうかれ風呂ひまをれ　孤屋

見ておれえこりれ路貫乃ある有り　千角
稗と掃くもの行灯つる籠　孤屋
辛崎へ雀のこもる秋乃くれ　千角
小よりは冷えれ月乃雲わき　孤屋
蝋燭して馴て来より湯の残　千角
上塗さしまう法を掃く望　孤屋
名残
小栗陸む行言まもせて気あり　千角
夕月もさゝつく浮前のらね　孤屋

孤屋旅立けるに興事ある時の別れ思ひに
今日日は未満ちもして吟行をゆ

甚角　孤屋　各十六句

天野氏興行

みちくだり拾ひあつめて案山子かな　桃隣

どんどと水の落る秋風　野坡

入月に軟をかんのうと赤作て　利牛

墳の弥まく　梢乃ひろかれ　桃隣

綱壺より京座敷らんてつるも　野坡

つまつゝ経まる　雨乃ついやむ　利牛

凡の気氣こうあんそよまうされ　桃隣

追くまこ所れて茎倉をまうさる　野坡

まさんしく斎もと常経ねお十六一　利牛

いつりきしい十月乃おそら　桃隣

垂ありし宝斎繋まんきそまく　野坡

ふみあうとし嫁乃仕合　利牛

ちんみりと神さま深るおそん　桃隣

鏡ねてきりするる夕月　野坡

隣あしん充佛きろ田る会の門　利牛

暗やみの足まきつしあたゝかし　野坡

人の指顔ねて　楽みのおきたる　桃隣

もちや深さもふつるぶつり　利牛

より平比様に雪稲ひゝすゑて　野坡

世のひ乃古ことくれもつへもん　桃隣

皆近さ香くし雑てはるし　利牛

ゆふしきゝ遊さるらく　桃隣

比度の茶をきゝし秋の茶　野坡

杉の木末に月ハうそくし　利牛

はしりけり恋の噂乃あらくして　桃隣

まうかされく又新酒に侍　野坡

よしやうれ家乃上にと聞て居る　利牛

あやうしんされてあそめの間　桃隣

帷子も一日もしらぬ暑さにて　野坡

名

ゑのころ想別　家のよ豆入　利牛

焼餅よ組合たる冨(トン)田鮓　桃隣

隣をこえんで今も移てゐる　利牛

鰹節に雪鰭とふするおあかまて　野坡

先仲までもみゆる入舟　桃隣

内でより菜の香てもまゝの陰　利牛

ちりしく風のやみ也まさき　野坡

神無月廿日ふか川にて即興

振賣の雁あハれなりゑびす講　芭蕉

降てハやすミ時雨する軒　野坡

番匠が樫の小節を引かねて　孤屋

片はけ山に月をミるかな　利牛

好物乃餅を絶さぬあきの風　野坡

割木乃安き国乃露霜　芭蕉

網乃者近つき舟に声かけて　利牛

星さへ見へず二十八日　孤屋

ひたるきハ殊軽業乃大男　芭蕉

淡氣乃雪ゟ雑談もせぬ　野坡
明しらむ籠挑灯を吹消して　孤屋
痃癖にはる湯屋の膏薬　利牛
上をきの干葉刻むもうはの空　野坡
うまに出ぬ日は内で恋する　芭蕉
絈買の七つさがりを音づれて　利牛
塀に門ある五十石取　孤屋
此嶋の餓鬼も手を摺月と花　芭蕉
砂に暖のうつる青草　野坡
新畠の糞もおちつく雪の上　孤屋
吹とられたる笠とりに行　利牛
川越の帯しの水をあぶながり　野坡

平地乃寺のうすき藪垣　芭蕉
干物を日向の方へいざらせて　利牛
塩出す鴨の苞ほどくなり　孤屋
算用に浮世を立る京ずまひ　芭蕉
又沙汰なしにむすめ産する　野坡
どさくさと大晦日も明はなれ　孤屋
ぬすまれてのむ肱乃痛さき　利牛
中よくて傍輩合の借りける　野坡
壁をとりさく稼せぬ身内　芭蕉
風やみて秋乃鷗の尻さかり　孤屋
鯉は鳴子乃綱をひかゆる　利牛
ちらはらと米の揚場の行戻り　芭蕉

月まちりのつれの袖ちらく　野坡
そそまつの岳乃三日月もかけ　孤屋
編炭俵ちりをとちらしまへの風　利牛

芭蕉　野坡　孤屋
利牛　各九句

雪の夜も出し口みまへん霜きし　杉風
日の出るまへの森さくらの雲　孤屋
下げ髪を一年後は剃り捨くく　芭蕉
あいこときまし大名の供　子珊
身にあつる風もふりて節月衣　桃隣
粟をうしれてひろき畠地　利牛

ウ
絶次れ混きれてる秋乃水。　岱水
笑うしらへて絵かれ夢へる　野坡
二三匹様おれ呼門の提　子珊
着る乃著おのさつる千よりの　沾圃
竹の皮雪踏に替へる夜はまで　石菊
称まふ子のさん雨乃そうし　杉風
あふ割れ一人もみえぬ浦の秋　野坡
めうとう風のすゝめる道急　利合
ちの月乃肉をかひもて旅大工　依々
背中人のみる見をとらへゆる　桃隣
着知しるよき台く上手氣ちりて　子珊
料ろうとくは小鯨のつくする　石菊

名
紙着てわくらば寒き旅子哉　杉風
背戸へ巳れて山くりもち　岱水
掛物りし菊に親とる　孤屋
九集先ては押まき積る白　曽良
條菜を擦く付へとくりひ近　桃隣
りさしりまく葉代の跡　依々
宿無てなくバと自慢てきたし　治圃
ゑおくりく火を乞てまる　子珊
又けさも佛の食く時を明　利牛
損て乞しに貫て分く　杉風
大坂於人居すれてる冬の月　利合
酒を乞まれく和舟の寄する入　野坡

まかぬる流系の箔のこゝけ　子珊
次此小部屋てつゝむせる声　利牛
殊に宿すりみく落れば坂は峠　曽良
七つのかり子如気歌峠子見れ　杉風
赤の名あるそして次字除出しく　桃隣
男まし生に蓬そろゆる　岱水

杉風 五　野坡 三　孤屋 二
治圃 二　芭蕉 一　石菊 二
子珊 五　利合 二　桃隣 四
依々 二　利牛 三　曽良 二
岱水 三

撰者芭蕉門人

志太氏 野坡

小泉氏 孤屋

池田氏 利牛

阿羅野

尾陽蓬左橿木堂主人荷兮子集を編て名をあら野といふ何故にこの名有る事をしらず予はるかにおもひやるに一とせ此郷に旅寐せしおりおりの云捨あつめて冬の日といふ其日かげ相続て春の日また世にかゝやかすげにや衣更着やよひの空のけしき柳桜の錦を争ひてふ鳥のおとつれさへづるこゑ風情あまりてよくの粧ひしこの美を尽しても猶あかぬ心地をのこしつくせるを中にも雅趣の心をとめて花の実をもつみ取りて其天然の形をそなへむことを思ひて野の心をもこひてあらのとはなれる事をかしく

元禄二年弥生　芭蕉桃青

花三十句

よしのにて

これはこれはとばかり花の吉野山　貞室

かましをつくれる花のあるじかな　路通

蔦鳥なるゝけふかくされの林かな　信徳

たち花の山ところところそなまむ　昆風

芳淋し花の塔の鬼瓦　友五

山里は酒よりの志かへる花人かな　尚白

行くれて花にさはる人の長刀　季来

みねの雲すこしハ花もちりにけり　野水

ますほの寺のまよひ行くまゝならぬ　亀洞

やのゝ下に客ともつれん花の宿　我人

花の山常行かぬ杖かずし　一井

見あはしよ人よにあらぬ花の跡　ほ[illegible]俊似

兄弟のいろは行ける花のさき　嵐障

ちる花を酒呑人もあらし　舟泉

吸物に薊もうしや花の陰　胡及

さく花に路の傘をさしてまし　長虹

牡丹乃花咲かぬ暮の雨　津[illegible]ト枝

わかるゝに立よりて近よる花の枝　[illegible]　鳴歩

連さそひや従者ハおくれし花の時　若[illegible]

疱瘡の顔やうつくしき見て　傘下

あつまれや風車売の花のかげ　荷兮

花はとうに散る山の上　とつ

山あひの花を夕日の見はじめて　心苗

折しらや雪の雲　越人

花の香や手をとりて遊ひの花は山やま　野[illegible]

さくら花昔みる尾上の　冬松

首出して花見る顔もなし　冬文

酒のみし人の後に　荷兮

月花もなくて酒のむひとりかな　芭蕉

あるく人乃山をあけてる

撞の木此ともれまかきかぬすゝくれ　仝

杜宇二十句

ほとゝきんを鍋とくゝる夜ゐて聲ゐ付よ　季吟

香竜は夏夜月ふくつらん郭公　素堂

月やさまでに実ふすらしきれ初るる本　沾堂

ほとゝきすよまなう蜀魄　越人

瑞婦乃ひとるふりやほとゝきん　松下

かゝりこのほとゝきすや附る　はせを

ほや先ら来なつく馬追の郭公　童五

ほとゝきんなきて心むらの聲き　柳風

あゐ人のほとゝきすたなしのかゝれ

ほとゝきんとくるまうき鳥ぞ乳　嵐蘭

暁のきぬ宿りや郭公きりし六　蕉梧

堪忍臭き梅気かつや時鳥　一鷺

三声とて江の村ともや郭公　何

浪かく

戸をまいらせ十日もまちき郭公　風泉

嬉しさや森のつゝぬ先のほとゝきすれ　杳風

あふしく今朝きく郭公　傘下

ちゝかそやカらほとゝきすみれ　月

ゐるとなるまでみかけう郭公　暁可

若すあり角の声を誰れかいひられけり　大津　智月

寄かくして子るゝ人とふ郭公

ようとしてうてきみてう郭公　李桃

うつろひし美のくさふくきん　可山

月　三十句

かゝるくと笹のしくれや月夜かな　梅古
されはしも月見る井の猫つれ　湍水
月ひとつそひとつせちの今宵かな　一音
西乃月に　てる子しれ蔦あかり　越人
なかしらふお服むく月夜かな　昌碧
昼からの宵のまさへすや月の影　津島　市柳
折しる不秋て添る月夜かな　一髪
とこまてもつく峠た月の世中に　長虹
旅寝して砧抱て月見らる　任他
一夜さいなきと見る今宵の月　亀洞

名月は夜明るきはもなかりけり　越人
名月やとしは十二の子のつら　文鱗
名月やたゝい酒さうて浪なく舟　昌碧
めいげつやそらをしてあるく子の中　傘下
名月や鼓の音し太乃し声　二水
見るものと見えて人の見ゆるかな　舟泉
名月の白くきかけ　荷兮
むつかしく月を見る日や火も焼し　
いつの月も後を遠しと思ひけり　仝
名月や海もおもはず山も見ず　去来
名月や下戸と下戸とのむつましき　胡及
めいげつはあるときよもえぬ林哉　遊若

一 宵よりみし 榎さびしや月の影　一髪

十三夜

影ぬしや 夜寒も越(?)る月夜かな　杉風

朔日

峯いくつ 月の氣もなし海の果　荷兮

二日

見る人も なし年き月の夕かな　全

三日

何事の見たてにも似ず三かの月　芭蕉

四日

よひ月を見んとて しらぬ夜はかな　卜枝

五日

何日まで見てなき(?)つきや宵月夜　伊賀 土泉

六日

銀川 見習ふ比や月の空　尾張 露声

七日

此月(?)を見て 降る月夜かな　竹筆 一髪

雪二十句

大津にて

雪の日や船頭殿の顔の色　其角

いざ行む雪見にころぶ所まで　芭蕉

竹の雪落て寝る夜なく雀かな　塵交

かさなるや雪のある山只の山　京 加生

車屋も雪を見にきて大さかな　加賀 小春

ちらちらと見てから乳を洗ひけり　越人
はつ雪や戸角ぬらされ庵かな　也季
ものゝけの雪ふぬも雪れ一ツかな　松芳
うつくしき板よ物縫見る雪の隈　二水
雪降る一る屋よ長いる出るかな　危仙
松の雪折ても出ずれ枝折人　除風
ゆきされ月や川筋斗あとしと　路行
雪ちるやおしふきる手の吉野之　傘下
雪乃はの大舟より小舟この松　芳川
雪乃夜から鮭よつる声寂し　冬文
雪の香擂てやはしや手ろの壺　桂夕
あらしや雪香が個煮塩飯　若兮

あけ河やせ先見後ぬて鐘まで　路通
はつし神し名が見ゆかおり不　北水
乗うけていくかのみかも海の雪　芳川

歳旦

二月雪ぬかりふせし京の花の奥　芭蕉
あれ人の手からもかし花の春　釈古梵
つかふや千年かうく縄　風絃
松かまり伊勢か家實人主雑　其角
うかるか首連歌ま見してす膏　文鱗
朝雪の多ぬ見すとてし門の松　去来
おさりかかや竹して年かぬ柏かな　一晶
えん家や紙く分されし達さかな　路通

元日ハ鳴すましたるかもめ哉　加賀 一笑

薗圃り梅の花ある白ひハ　大坂 何処

娵入の社きゆる程としの春　岐阜 落梧

若水をとくちかけて見よ吉野梅　亀洞

傍の浦や去年川添ひの影の春　同

まじかれ代に冬をつゝみて若菜梅　昌碧

去年の冬ちハさくなりしろ芋以　之慶

小杓子雲やひろそむまつのうと　舟泉

とし男に神楽をならひたり　同

山はまだ白うしろは竃の煙　重五

松かざし引馬ゆかし年始　釣雪

宵寝乃神を既能の峯より口の家　仝

連まちて子ろよ待せくりてな楽乎　一井

いつも白もそそちる鉢の雪あ八　胡及

これからむ年や新玉の年の海　長虹

を鮭に記く渾娵しかしく柳八　鼠弾

さか雛や今ハ此面をいるかし葬　同

蓬莱や舟乃通のこうえなくもて　湍水

佛しるき神をまうしと紀る歳のまた　京 ゝ見

のうまやとしの息をいうかれしん　朴什

そこかれにもたちひゐんたりし哉　冬文

正肉の魚のかしらや炭さかり　鈍下

夕されは寂しからさ原園の郷　冬松

あいくゐ松かさ門もわりしろや　柳風

大服は去年のまゝの匂ひかな　防川

常花も字まのれ年拾して　大山 昌衍

傘に畠梁かゝりつ元日　夕及

紛すまく桜の花ちきる元朝の春　梅首

出てくりむ霜や移る大かくし　兆水

曙を夏の袖やたゝくら　仝

そら美はさらに光く鶯かく　越人

初夢や須名の橋のそれさ旅　仝

志川や志保清濁に寺の書道　蕉子

万象の中くを隣に吻にかゝり　同

己のとしや若しの去れ松風つる　同

人を去る月かくれ寄るまゝ毛作　傍 般齊

乗せる或り春やも来る年の夷　貞室

初夷

若菜つむ浮をまと割かな　越人

雑出しく摘もこそぬ若菜かな　淡路 撰衣

七草を七ちぬとるや注子かな　俊似

女出てく手濡れおくの若菜かな　加賀 小春

側濡く波の打りさ磯菜かな　蕉雄

昔くもの乏しそとぬ若菜かな　岐阜 素秋

不動くつかくさる梅折し白き　文要示

高雪く折すてゝし裏梅の香　鴉歩

れゑへのむもめ梁かつくぬれしまかな　越人

叢の人去れもとくに折らん梅のな　落梧

梅わくあちらこちらに世中に　一髪
墓もおかさし炭のすへいを都はしき　冬松
みのむしも忘れ侍る梅のさくらか　蕪至
洞代民部の息子に逢て
雲水の本にあかさやくらき梅の花　芭蕉
うくひすの鳴こゑくる夕風この花　蕉風
鶯れ鳴や組ひらふ竹きれても　玄水
あらはのや鶯し出るそこ汐瓶　一桐
鶯まちへさきき若あけ揺る竹し　一笑
うくひすそれ声よ眠くふ巾ふ　市柳
鶯らし発しこもあこそ乱れ変　夢々
うくひきそれみ頃こ汲も河ゆ出に　林古

はやとみむ人とまりの盤ふ那　旋水
好くく稲乃ふえしぬ扇ふ那　塵艾
好人の蓑をゑふ御あ あへの衣　久之女
かれ葉や々かさくけ色の乃二寸　芭蕉
うも隠ふ草や馬の眼乃まらくしと　傘下
西仙乃ゑくるつるくと妻くよ隠くうろり　路通
嬉しさを静るりしきや月の枝　葛々
蕭寥訳
さし木
つきさ身もし埋めのぬきさへるさし木に　舟泉
接木
つまの下らくーーより咲せる継穂に　傘下
槿

暁乃鶏にあくるゝ涼しさかな　為今

月

藪深く蝶気のつかぬ月夜かな　卜枝

素堂

さる事を以て夜毎一ツに月見かな　鴻水

月

ままの事月見るとは手こゝ　峯峰

雲尾盤

くもりもの風つよき夜は白良かな　雅考

蜂の井にまづ見かける草かな　寄生

立聊も萩草つゆの明夜かな　千葉 亀助

すゝしと親子摘みり添くまし　丹泉

すゝきとつれやつまれや土筆　其角

すゝしく素山までのをのの土筆　蕉堂

土筆やよそまで見るつくゝし　指車

川岸やくさをとめてつくゝし　冬文

はくゝし乃巾にゑまる土筆　去江

葉茸の主人池に銭を投じける時　素堂

池に銭投じ僧の書頭に柳かな

風の吹方を後に柳かな　池水

何すも那しくもまり柳かな　越人

さし柳えまるへ折りもらし　一笑

大そらりゑやゑそぬる柳かな　小春

すゝれく柳は風にまかせつゝかな　一笑

とらまへて筏をとむるやなきかな　昌碧
さそはれる髪のゆくゑや柳かな　杏雨
うしろから頭のつるゝ柳かな　此橋
此里に牛のまさむく柳かな　杏雨
此風に流るゝまゝかやなきかな　松芳
うきふねの月をわかるゝ柳かな　校遊
いそうしき世渡をまつぬ柳かな　荻兮
蝙蝠にみとろし月の柳かな　臼
まゆ柳ゆられて通ふ車かな　素秋
門いつも流れくる柳かな　路歩
菊の名もわすれたる柳かな　生林

仲春

麦の穂に菜の花かゝる岸辺かな　不梅
菜の花や桜菜乃香も此あたり　芝紅
なの花の花のいろまさる日影かな　傘下
なの花の畦をちのつれふるめかな　清渕
うごくとも見えて畑の菜種かな　玄来
万歳を仕舞てかへる麦田かな　昌瑶
つゞきまて桃をくれてさゝらかな　越人
庭先に一本植しさくらかな　笑艸
とまらしハ蓑干さらて咲き桜かな　除風
またとくにほへくれし桜かな　一橋
うしろよりつくれる池の桜かな　季松
まごしくゝ山やくれて遊さわり　一髪

そよ風にちりくるてふや春の雨　野水
あふのきに蝶とゝむ野辺の垂柳　除風
ゐる蝶をつゝとわたる雛まつれ　一雪
行くる蝶縄解てやる雛の庭　塩車
手をとつて谷中あるけは蝶の影　山崎 宗鑑
鳴きなくる蝶もあひぬかなつかな　落梧
あさつまをむつかしさうな子喝蝶　越人
いくすぢも背わる背のかゝるに　去来
飛のくもはしみゆくかゝらず　落梧
不図と飛く清よ居茶を蝶に　素下
御ふやきの屋細よいるかなふか　一井
まつ蝶と兜のゆえあれ蝶ひに　柳風

櫻桐の花にとまりて居る蝶かな　梅伴
おやかしの中をわらぬることなし　炊白
かれ芝やゆふ暮寄りてゆく蝶　百峯

菫

何の気もつかぬよ土手の菫哉　忠知
ぬりてしと馬ちから菫草　荷兮
やうらくの古き絵を菫かな　野水
爰ももり日の道の菫に　舟泉
草刈に菫選出ん童、の舟　路歩
行蝶のゑるを残さぬわさゝかな　知遊
麦畑の人見るたびに嘆哉　杜国
先け山や猪の肉のすゝけ　大坂 式之

ほろほろと山吹ちるか瀧の音　芭蕉

松明に山吹うすし夜のいろ　舟泉

山吹とてふのまぎれぬあらし哉　卜枝

一重かと山吹のぞく中へ哉　岐阜 徳官

とりはなし山吹のぞくいくさ哉　同 蓬雨

あそびにもゆくとも声しぬ燕哉　玄素

去年の巣の土ぬり直す燕哉　俊似

いそがしといひぬばかりの燕かな　長之

燕の巣を覗ひきしか烏かな　長虹

黄鳥にゐてさされるつゝじ哉　嵐禅

友減して鳴るかひ鳥や萩乃原　旦藁

角落てやよくも見ゆる小雨哉　舊笠

若清に新よし浦乃汐干哉　越人

杉苗も同じ飯子や桃の花　傘下

人妻の母と話るの汐干かな　三輪 友重

山まゆに花咲かぬる躑躅かな　荷兮

微雨やあかるくてかろき夜の花　兼正

論やに夜のまゝくけぬ椿舟か　亀洞

永き日や鐘撞実路もくれかねて　卜枝

永き日や油しめ木のよはる音　野水

行春のあかし堀うしを残しけり　同

初夏

ころもかへや白きを着てをふつれ　路通

一更花嫌もわしすやわしくさふ　傘下

こゝろもえへ刀もさしてつれられて　撰 嵐弾
首柏老人のまちなかりし　あし山とふ
香をとるのえふむけふ反鱗かふれなる
とゝ香の紀越人かりちかるを忘れ
うく咲るつゝじの比文鏡みやつかれける
鮓子嬢ゐまもあるべし紅更　荷兮
山路来て
なつ来てもたゞ一ッ葉の一ッ哉　芭蕉
いちごつを打くとふみゆく人の清さ　一井
横井の末乃いつも見てる花の武　越人
切ふかの竹の露や色を乃様尓　落梧 不交
若葉やうちまくふれならぬ此木尓　日 岩羅

わけもなくその木しのつゝの夏尓　亀洞
ひとくとこゑうつくしとある旅笠尓　竹洞
せあかりしてふくさ名残ゆかへ尓　舟可
なけや雀下ゆくふねの沢卯末　菱々
上ケたる穂の稲として麦一穂　玄察
桔梗あるを麦てるもつくる甘茶尓　生林
麦かりて垂乃ふたがり此りかり　松露
むさかしふ志うて里乃菱尓　舟可
志ゝ蘇子みこそ名や蝶の氣文　嵐案
月夜もこくあふなさけしの一尓　落梧
乞し数く添ま実とらるゝ夕尓　岐阜 李桃
大粒な雨はこたえし芥子の花　東巡

若さめや四ツを拾ふぬ芥子の花　吉次

深川乃庵をとく

菴乃あとも見しらぬ身にて　嵐雪

さびしさの月の夜に松花出る　野水

仲夏

手のうちに蚤もこぼるゝ螢哉　挑井 元補

刈草乃もる風よ出るほたる哉　一髪

窓ごしに障子をのぼる螢哉　不交

園よりとりとき人呼螢かな　風留

夜細く逃まるぬ沢の螢かな　素江

手の水も下えるまでに螢かな　倉咕

くさりに袖をさし出る都かな　ト枝

五月雨に浮なる紙乃月や哉　鴎歩

ちりうせて藻塩草とやかし行ころ　秋芳

こちらこそのとくあやめの軒端哉　小春

城乃むれて梅の一本の墨かの　杏雨

うつりかふ二株世帯のあかり哉　二水

なれにれ傘乃あらされ小路哉　一笑

城乃濃くにごりのうつなりけり　胡及

蓮の葉とつまる蛙の留守かな　見行

汐引きし藻の香も若うか　此橋

足伸べて雛の百人一首かな　長虹

竹乃子ふわ桃さげくまでかや

筆のあとまで青し弓の行　玄来

同じ事さえてしあさき水鳥ハ　世云
あら鳥に柳きハちる汀かな　大津 一彡
このはさ小舟よせぬる月のゐ　尚白
舟よゐ傘にまろなきをるるに　亀翁
波阜にて
ならひ(ぬ)さもなき鳰の繩ハ　貞室
杉の一本にて
おりくるやことからしき鳰舟ハ　芭蕉
おなじく
鳰のつゝまれて嬉し　荷兮
同
其あしの鯨も鳴しん鳰の舟　越人

先たつ乃数もかゝらぬ鳰舟ハ　大津 淳児
曲江に舟乃つれらぬかるゝハ　梅餅
鳰乃巣乃見えたりあるいはかくれたり　路通
松笠の緑さびたる夜鳰ハ　卜枝
蛇乃根をかゝれ鳰の標ハ　絶可
菰乃花や浪をとらふ肩の巣　仝
拾ひもや荷葉書人をよしのぶ　越人
浮しや埋乃分夏のあさ　荷兮
夏冬やさゝ雪に笠原人の里　旦藁
菴の留主に
すひつきくもとしに夏乃山儀　其角
夕ぐれや鳩をかくして此瓢りふ　芭蕉

ゆふかけの志らむハ人乃志らぬ也　雅水
夕良八蝶の鳴わめくしさかな　倚書
山路来く夕良又なのかゝれ　津島 布柳
名八屋ら海夕良ヿ似く哉も　芸虹

暮夏

樹も動くやうし蝉乃声　昌碧
むしの路綴るけ不かくむ乃かり　雅水
夕かゝ干傘ぬり垣穂かな　傘下
涼しさ不夜まやもゐ雨夜ゝ　多節
涼しさよ白雨あとの入月影　表來
簾しく涼しや宿乃あかりかな　蘇亭
まきる隠比所おつくし墨かな　门

おもりれ乃人よ逢ふらうかす哉　峡海 如風
飛石乃右かわ中州乃下もそこ　津島 俊似
涼しさや棲乃下ゆく舟乃音　仝
挑灯乃もとやしゆかし涼し舟　卜枝
ましましきとまりまする川辺かな　赤羊
吹わたる風乃ふくる蓮かの加　岐阜 秀正
蓮みむ月ふさ名やき八やくとも　松坂 晨風
夕まくれ鳴くみえ浮く蓮よ手折り　古梵
納骨ふ名乃やまれ乃ふれかな　芙水
ましくしと志らり又松乃古窓かな　芸虹
すまきりく汐干乃沖乃清ホかな　俊似
連あまさ待もく清ふ志らかな　文瀾

ひきさく馬士のすゝりも志くれ八　潦月

かうもりも淋しさ忍ぶ志ぐれ八　尚白

座敷をぬけて結ぶ志みづ八　一髪

出がはりや幕とぬうえて桜紀　卜枝

麻の葉に晴ぬ川れるの路　岐阜 李晨

羽織着て後に付けぬ名残かな　越人

綿乃花出ゝ葉に似たる八　素堂

初秋

ちらしけり麻かるあとの秋の風　越人

桃の葉や出る川ぞ人旅の風　圓解

東西山雲居の高く

一葉散まゝし帰りきたりし　仙化

ひうちのちりや秋の夕しき　はしま 方生

男くさき羽織を星の手向哉　杏雨

秋白き酒盛しぬさうりける　芭蕉

葛や坊主のまし乃志てらさき　文鱗

あさかほ乃白きハ露もきえぬ之　蓬雨

手をとらりのよいの白ふあるて

秋風とものゝ手すまにかけり　旧

嫌ふれあきたる行ぬかたり　野歩

あさかほやひくしの水に張る月　胡及

真あらり露に拙りつ雫やの出　嵐弾

秋風や志りきえぬらに張ぬん　去来

涼しさを飛ぶ露より白鑪のかな　昌長

畦豆に鶉の入る夕日かな　游刀

まつむしハ通る跡より啼やみけり　一髪

きりぎりすと蛼甚く鳴まさり　素秋

あの雲ハ稲つまを待たより哉　芭蕉

はつ月やまだ宵の中ありし西　其角

ふまれても起くそうしや萩の花　舟泉

ひよろひよろと猶露けしや女郎花　芭蕉

棚作りそこし見えさりしき葡萄哉　作者不知

艸かりよくかしぬも荻の穂に哉　伏見 任口

こえきれく帰婦をふく落穂哉　荷兮

行人や堀にはまるむし落　胡及

宗祇法師のことをよみて

見しらぬ中にて咲く菊哉　素堂

よしよしの頭の根よりさそき哉　俊似

仲秋

かれ朶に烏のとまりたる秋の暮　芭蕉

つくつくと絵を見る秋の扇哉　加賀 小春

谷川や茶袋そゝく秋のくれ　津島 益音

石切の音もせまりて秋のくれ　傘下

茶乃ねや蝙蝠出る秋の暮　卜枝

簾のまへ人乃息くれ夕入か　一髪

田と細と穂つれぬかのむしの声哉　伊豫 一泉

山猫の康る雁へく茶けり　重五

行ひとかなたは人の酒乃向　其角

志らぬ人に抱かれて見る紅葉かな　東順
菊の中に紅葉あらしき桜枝かな　林斧
まとしまく地にもふる葉の若く　越水
わら布さしこむ秋の夕哉　宗和
わくら葉にこぼれしは
恥かしさかはり秋のおもかけ　加賀 小枝
青岸へゆかりしく
蓮の実のぬけつくしたる蓮のから　越人
一本の芦の穂痩しみさゝきかな　防川
松の葉に吹わくられて秋の蝶　舟泉
まつしくて袷しける放屁のきれかな　胡及
ひやかなぬ市のきぬたかな　暁鼇

関乃素牛にあひて
さぞ旅路のあやしき衣はな髪　其角
よしのにて
きぬたうちて我にきかせよ坊が妻　芭蕉
いそがしや野分の空の夜這星　加賀 一笑

暮秋

あすからく惜しき菊の句かな　巴丈
ちる菊のちらしぬをおしみおしき　昌碧
山路のきく野菊とも又ちがひけり　越人
一もとや伐しぬ菊の花さかり　暁鼇
茂野が室に旅ねをなぐさめて
とて扇にかけらる名ぞ惜れけれ

かはらけの手きゝつくせや菊の花　其角
菊めつる人や鬘帽子　同
くつまあらて菊作りて折のみか　二水
かくありて菊まくの婿来かな　千閣
淋しさは橿の実落るね覚かな　芦夕
移る菊てのこゝろちれや梅りしき　加生
芦の穂やまつ○く吹まつるおそれ　路通

初冬

あさつちの乃これしきの時雨かな　湖春
ところの人手つから夕く　尚白
一秋末く三舟寺こえ初時雨
きつられ紅葉りの出ん乃まゝ　湍水

万句興行に

見ちり逢ふ人のやうでも時雨かな　荷兮
人をはうらる日ね
を鮮る桜とうもとりうゝるしられかな　落梧
的りの乃ぬ縁のこゝ去られうれ　欣武
浅し守とへり蓑着るしられかな　傘下
こかうしふこうの月乃婦きちるう　落梧
一菊ねて柿乃菊こゝ手を数よりり　一髪
このとく浮き淋しき囲爐裏かな　同
枇杷乃花人乃つとこし赤浅きれ　同
菊乃もそりのつおをまゝへるかな　李暑
梨子の花志られまめれて淋し　野水

蓑虫乃ふらふらするや佛花　昌碧

夏やせをさく前栽にありし菴かな　仝

乃とかりしや書物も此乃名のく　一井

羅りのをとまて みなあちる火桶かな　落梧

石臼乃音なれくおりしやつての秋　胡及

書くしもとくさはきのえ栖かな　文鱗

あそしみ紀路額よりる蕪うれ　半枝

手枝に風の作るる秀き哉　洞雪

蓮池のうらちハえゆる枝かな　一髪

ゐをと飛く石まつや條くかれ雅かな　松芳

こかるしよゆるしく主乃爲るの帀　杏雨

あるる稿の路よひきつる葉の巾　蕉堂

ゑき月

烟を出して安く月を面白き　册丸

あさ漬の大根洗ふ月夜かな　俊似

仲秋

杉のしめ縄まつるる穀かな　津島 猪吉

きりの滝とつ主なれは穀かな　同 宝佐

橘よするる葉に新酒穀かな　林可

栗の実をほしくもあかれかな　李雨

時しのる紫を抑らせはありきかな　宗之

実の穀せんさんの實のことなれり　杜園

禾稲乃芸州のなよつえてる水かな　猪吉

深き池水のよ流よ眼くきろう　俊似

つきゆきてまた霜ちきくの蔦氷　涛風
寺行きて何をうしなひし氷柱かな　秋舟

萬歳ニも舞

踏まよふ宮の雪家ゑんにも坊主かな　嵐弾
ぬつくりと宮の雪降るにくさかな　荷兮
來まて八先く宮の雪降るさかな　長虹
さる風より雪の門出に歌うたふ　一井
宮の雪月や綿帽子被るる　亀洞
つくづくと打くるし宮の雪の綿かな　倉咕
来の海や頭白く鴨啼きしら　白炭 忠知
舟みなくれ出発と寄る衛ふれ　亀洞
鮮を見てさもあらん友千鳥。　村俊

井ほりのさまも六月かく。　冬松
並ぶく男ハ冬裸かな　利至
汗出しく谷よ寒さむ氷室かな　亀洞
海気揚の壺埋めさき氷むろかな　坊車
炭竈の穴ぬくくや霜けかり　かが 一笑
膝節を津とらえて出るさむさかな　亀洞
火ともして炭団よ冬のね冬枯　芭蕉
いつてりし疵起せねみ津くき
みる蓄のまでよりそ乞比ら

歳暮

餅つくや内みも打ん酒らひ　李下
吉事くらゐ梅乃り年の名残　尚白

かちに花の後ともしらでちるはし　雅丸

ちる近く樒つくる茶畑かな　亀洞

煤はらひ梅にさけたる瓢かな　一髪

朝顔の月をみてくる人のこゝろけに

とて柿乃実もつまれくる年

の手やとくしあかりんがさらする手せんとて

としのくれ柿の実一ツころりくと　蘇守

門暮とくるく蛤一ツのかひ　内習

田畑に鼠逃ぐよの中さまに　亀洞

雑

年中行事内十二句

供屠蘇白散

いそけなやしらでなるをもむる人ぞ守

年貢白朮

としくれる君乃衣の淋しさに

石清水臨時祭

皆さまもたつかなとんさめるる代

灌仏

衆の身乃身やつゆてに洗ふ佛達

端午

柿も痩く菱背ふ轡くらべし

施茶

うち向くわろこれ茶を出申さ　蘇守

乞巧奠

ゐの葉にも七夕の歌をかくよき

朝迎

爪弾も旅乃すゝしやうえむ之

撰虫

草の露や足乃ぬれるきりぎりす

十月更衣

ゆしきれ衣之やしろ艶の花

五節

舞姫に袖をひ指を折りたり

追儺

打られてや服もいつし鬼の面

詩題十六句　野水

今日不知誰計会春風春水一時来

浪の上に流れ浮ぶ春の風

白片落梅浮澗水

みるる乃そうに行く浮梅白し

春来無伴閑遊少

花香にさそはれの若さし譲る飛

花下忘帰因美景

席入かくこの川きせまよ花の下

留春春不留春帰人寂寞

待ちもてこらへ春乃帰るれ

厳風吹袂衣不寒復不熱

錦睨にかくれし池のはちすにほひうつろふ

池晩蓮芳謝

暑月貧家何処有　客来唯贈北窓風

蓮乃花も切ちるさまをみては

涼しくて切ぬるさまかなりし北乃まど

大底四時心総苦　就中断腸是秋天

吉の旅とまりてこしへ秋乃空

夜来風雨後　秋気颯然新

秋乃雨もれく成ぬ人もなし

遅々鐘漏初長夜　耿々星河欲曙天

然ときこゆるもあらぬてなきさき

残影燈閑墻　斜光月穿牖

独り寝やさらぬ色まさるの月

万物秋霜能壊色

水草もあらぬと秋乃霜

十月江南天気好　可憐冬景似春花

こかくしもちくし鳥つく小春

寂寞深村夜　残雁雪中聞

待さまに出もてぬむしやまのさと

白頭夜礼仏名経

佛名乃夜は腰懐く白髪ぞ

禅窗乃梅ひのとし浅まし

さまられわりしくて

錦繍目足

かなりのかなり白ふのてきさつかり

再哭

付木賣 みしく園にも鍋てこゝは人乃家

釣瓶縄売 思ふさや酒のもとより秋の里

糊賣 あさ露乃きゑぬうちにむつくもの

馬糞拾 こがらしの松の葉はきとつまるて

李夫人

魂在何許香煙引到焚處 越人

かげろふの絶つゞくつのころもかな

楊貴妃

雲鬓半偏新睡覺花冠不整下堂来

とる乳に常ゆるさるゝ藤貞々那

昭陽人

小頭鞋履窄衣裳青黛點眉々細長

一分人不見又應笑

もの数奇やむかしの春の須磨あらん

西施

宮中拾得娥眉斉不放吾王是愛君

花ありて植くらべし牡丹々那

王昭君

玉貌風沙勝畫圖

とし来ても去られぬ身乃柳哉

一日もとをまるの紙かく 稲香

卯 寐ゃの姫や法師竹焼のまとあれ

辰 牡丹の生ん繪書乃来る日ぞ雨

巳 潜秋乃眠つるたつゝ扇々那

午
未
申
山獣
世帯
里虫
海魚
川魚

水[illegible] 樹水
嶮乃[illegible]武家乃夕食[illegible]
五月[illegible]
[illegible]生と[illegible]
簾笛乃上[illegible] 見行
鴨突乃[illegible]長き日[illegible]
枝[illegible]虫[illegible]蜀漆の[illegible] 舎帖
[illegible]鰯[illegible]盆乃月 仝
秋乃[illegible] 舎帖
牛馬四足是謂天落馬首穿牛尾
是謂人
一[illegible]桃乃継木[illegible] 越人

蔵舟於壑蔵山於澤謂之固然而
夜半有力者負之而走
[illegible]師走乃[illegible]
絶聖之棄知大盗乃止
七夕と[illegible]
鋭者夭
散[illegible]花[illegible] 桂夕
流者[illegible]
[illegible] 市山
[illegible]房
[illegible] 一井
師[illegible]

うらしく人よみつゝ菊かな　長虹

一休

明かしの松から松しや月の雲　瑞水

法然

浄土多乃法の教も乃むこの花さらんべ　風綠

山岩

杉く山に霧も蔵る岩乃角　瑞水

海岩

苔しみし波にも出ずめり　仝

名所

八重桜奥を見えし誰田代　杜國

しし奥乃峰や咲りも大江山　桑門

辛崎の松は花より朧にて　芭蕉

葉一把られて落るゝ河波哉　瑞水

浪越のたゝてつゝのあゆ寺の鐘　蕉子

琵琶湖眺望

雪残る暮嶽もさき湖の波　含咕　宗祇

園にさくくさも寝ともしらぬさくら哉　湖水

三井寺の門たゝかばや法のや

眺るをつくく花しみよりや　杜國

草世出く布を春打しゝ見る哉　重五

書うつや内卯も花さき志賀のさゝく　芭蕉

みくく雨にかられあなりのや瀬田の橋　去来

湖乃気もすさりりみ月雨

牛もあしる稲乃みのりの夕月西　一髪

角田川にて

いさ乃ほれ渡舟乃鮎舎にも都鳥　自室

みやこしのといふ秋乃夏乃都かな　破笠

いさゝかもさらさらしかる乃都かな　芭蕉

夕月や秋よりたつる角田川　越人

九月十三夜

唐土に冨士あらばけふの月もみよ　素堂

鴫突乃ゑるやうなる稲田かな　胡及

鴫突も萱津乃あとのむしろかな　渕支

武蔵野やいくつあるとも時雨　舟泉

鴫を屋根かゝへてさん村しぐれ　尚白

かしら斎やとまりあつきく渺時雨　伊勢 路友

むさし野と松めくるさの果かな　洗悪

先とししと生海風と鐘や小の奥　俊似

手されの轆轤やとのく秋くれ　津島 一笑

旅乃冨士首や秋とかれ　湍水

冬しが山は大高乃ひとつ哉　冊水

早稲乃香やわけいる右ハ有磯海　芭蕉

秋のよ乃月や天の川の蝶かな　如行

旅

雲雀より上にやすらふ峠かな　芭蕉

大和国平尾村にて

花乃陰謡に似たる旅寝かな　仝

象潟里を眠つゝ通りけり　夕帆
日乃入や舟よへくり桃の花　一髪
のりかしや湊乃宮の笹さゝ香　荷兮
出る月脱てしもうまとはぬえ文　芭蕉
　ある人の餞別に
わかしきれ涙わかれて笑ふ句　涂風
森のしゐ子含焼鳥を啼やさとき　秀松
数とこうれうちれ寂啼る旅森八　昌碧
みつく風や桂国を出る市乃家　松芳
冬こそまその大名の一志は哉　傘下
　芭蕉去を送る
稲妻にかくしてつまさる別かな　路春

なまきしく髪にすゝる秋乃蝉　一井
あき風よやよ◎するまゝされぬ　北枝
拙いろし出きさく秋乃かなしさよ　舟泉
音をやもとすゝると松よつんてぬを　嵐蘭
　さゝしなまりくくうむうひて
更級乃月を二人よみてし拝みけり　荷兮
　越人旅立けるとき京なりけるかたに
月よけ服積つるを寄る乃うく　北枝
おくられつおくりつはてハ木曽の秋　芭蕉
蜻乃草に見もちりの秋のいろ　路通
　粉舟補よりて拙甚角乃ぞまむけ
　よおくれとて

狩衣稲に二筋もてつゝて秋乃山　荷兮
とゞりし綿をむすひてつけり　京　ちる
入月にかゝたしけむすまをろみ　去来
能きけも　訳にまうけきぬとろみ　一井
品川まて人のおくりきて　文鱗
澤庵乃墓をとふれ乃秋の暮　芭蕉
艸枕おもしろしろかる乃聲　津国　常秀
旅なれぬ刀をさしても村しくれ　荷兮
鳴海にて芭蕉翁に逢て
いく萩をつれそしと袖もほころひ　
萎えし羽織を綿乃父より　冊水
其角にかへし附

おくらんのかりのそつくる露の岩　荷兮
天秤くゝりて秋をかく露乃音　越人
うつ尻乃子にくゝくゆく子哉　傘下
里人のまうけはとかし乃宿　宗因
戴人々く吉田乃澤まて
まりれと二人旅ねとはありしき　芭蕉
旅寐しくみしや浮世の煤掃　同
述懐
草庵坂橋にて出る附
きゆる附を衣も　路通
まくさ稲杵りく田もち嫁の那　此宜
念仏乃西乃往入ぬ浮世哉　諸格

うる卅て

芳野にてかさ恥の奥乃院　杜国
桜さくいかにあはれ乞食哉　梅香

高野にて

父母のしきりに恋し雉子の声　芭蕉
あやなしや新さくらをのつゝき哉　越人
さゝふ入湯をすゝむる一盞　曰
一本乃茶すゝもあまる絵の哉　杏雨
有明を旅の子にて出る世の夜　杉風
似たりしや白髪かつく麻衣　亀洞
かくれ家や十日素字の真ふかく
かくれ家やよき業乃中に持る気　嵐雪

このほどを貪るきくの拾穂かな　越人

人乃いほりをとひて

されはこそあれたきまゝの霜の宿　芭蕉

同里の人にいはれ

こからしに藁屋かたむる中ひの哉　杜国

鎌倉建長寺にまうでゝ

藤かかくすゑを洗ふにねたかる哉　越人
ある人のもとへつかはしけるとて落葉哉
一葉おちて秋

あきの秋なる落葉の錦や富士より　荷兮
古人の心を思ひ出る暁に
常ならむ鉢乃暁や冷む滝の声　嵐竹

梢乃空に鶴子宿さん俤ゆかに　去来

月や遠く耳やちかきしの音　西武

古里や臍乃緒に泣年乃暮　芭蕉

さ梅しの夢しを杉りの身の暮　除風

老をかくして鬼貫先生に斯くるに

行年や親に白髪をかくしけり　越人

哀

まつの聲に心ある人乃亡骸に　甲斐 一有妻

きぬぬいても金比羅よりも時雨　除風

姑出て麻をきまする別に　長虹

むし干乃月に立枕かな川に　文瀾

虫干に小袖みてなく女哉　冬文

さゝけめし婦に添させ子ならり　心棘

ゆふべ粉鉢盛るを見て

青園乃稲妻消えや月の影　長虹

一のみを人待つのぬかをとゞむに　尚白

さひしなれよ

つまなしと家もとられし女郎花　荷兮

まつこゝろ落葉に鳴るつまもとなる　小春

妻乃らちのあとよりさへ跨まゝ　越人

松の中時雨旅乃ともろに　俊似

梅もひたむ雉を鳴いゝかなしむ　舟泉

くしゝねまいゝ雉消る別れに　嵐蘭

山畑よりの戻りや暮川　松芳

きぬ〳〵を数へて戻りけり　冬松

桜ちるしやきぬ〳〵乃比丘尼　昌碧

無常

未勘子

落る花を東西に流れ行く夕か　安義

母に出る追遠

咲川数へつ多月なきかし乃白粟　傘下

未朝子

東西や空さへ明のほとゝぎす　堺　元碩

松坂の浮瓢ら女人の手まくら

さるまいひなりけり

梅乃ちり散るぬきうりや　荷兮

つりくもの追ひけり

名月へ子かなしく涼しき蛍かな　京　去来

あくるしきりれけ角やきん

あさ花の小風ちらちらと　蕉兮

世をしのく妻乃身なりけりは

名残の桐のこゝろかし　玖水

辞世

あき枕蓋一ツまる工斎

子きされけりは

似る秋乃あつさ出せん一羅　落梧

一原と露く

冬く落や小町乃ゆのこゝろさま　鶴雪

妻乃追善に

とし暮て其の里人にわかれの心　自悦

李下か妻乃なかりしをいたみて

稲つまやかほへひゆく小夜ぎぬた　去来

亡妻身まかりし後

その人の鼾さへなし秋乃くれ　其角

母におくれける子乃あはれを

おきふしや蚊屋より合て秋の暮　尚白

ある人乃追善に

埋火もきゆやなみだの烹る音　芭蕉

旅にてみまかりける人の

あハ雪のとこのぬくもり消にけり　嵐雪

鳥邊野へゆくやまかせの朧月　かゞ 小春

釋教

伊勢にて

神垣やおもひもかけず涅槃像　芭蕉

眉ふくる母おもかげしりぬ涅槃像　嵐雪

西行上人五百歳忌に

そのきさらぎを又有残る日の月　荷兮

おもはし遠忌に

連翹やまとりにとくも寺の跡　胡及

うく首塚の巣かくる二王門　松芳

木履きく綿も盛り雨乃花　杜国

はりをふる扉たゝく花乃寺　冬松

花に洒僧とも侘ん塩さかな　其角

貞享つちのえ辰乃年弥生一日
東照宮乃別當僧正乃坊にまかる
大師遠忌の法華八講の侍る
をしへきこゆれは猶ありかたくて

序品乃こゝろを

散る花乃いとはむかしもあらじ　越人

女房の聴聞すかたもしほらしく
あはれ清き御はかり龍女成佛の
ふかさもありけんとあかむ声の
しはしも

ほとゝきす涙や風乃一声　同

観音乃尾上乃桜咲にけり　傍似

古寺や清ちぬる山乃菫草　一井

八島にて

海士乃家聖よむ弥生かな　伊藤 千閣

咲よりは今年寺丹紅牡丹　一井

夏山や水涼し乃江湖かな　蕪葉

木曾にて

淺緑の月生れ出る蘆乃子か　芭蕉

漣乃そゝ汝清し志ろかさゝ　尚白

三ち世にて

腰乃あふきさ礼笑ちり乃は山か　一宮

冰にはつく菴一日乃清水かな　加賀 一笑

十如是

ものうさも流れて通るしるべ也　荷兮

即身即仏　愚益

夜深乃露を捨さるへん乃仏外　嵐雪

隠こもらむや結の縁むる衣哉　荷兮

打ころく七月すてあまく施餓鬼棚　桜九

打うけ乃火をともむしの手向さよ　文里

石菴に施餓鬼乃棚の花もち外　亀附

魂祭舟よ祭る河とゝ手向けり　卜枝

打中の海つり道の余あくみ世の露外　納宮

椿結のやしらつかさてん松の陰

平等施一切

掾待に象打人をゝ絶けり　俊似

稲妻よ大佛打の御手外　惹了

頭翹より導娯くさせ我外　卜枝

あるゝ人四郎の景福ある水鉢

しは薪紙不合なし不関をさ盛し

みも馬をゝらさてす

原くそめ人佛ありあいめさ、　荷兮

あるきる乃思はま

葉は寺乃鼓かつりうて　其角

衆きて出さく　坊ともりゝ内の手　一井

清乃てそ高僧をうける法師代　卜枝

人のりまあらしてさら出なし

れのそまて去られゝれそ

をしみて又きれし夕の一汁ゐ　嵐輝

鎌倉乃要用帰るかく

たのしさの旅や直す水きれん　越人

古寺乃雪

曙や伽藍乃雪乃人も衣　義今

日

音羽やくる二三乃作晩　俊似

つくりたてはされたやし音仏　一井

名森する人のさわすや鉢たき　文烟

手鏡もるもかせりし手のくれ　甚角

薬王品七句

如寒之者得火

まつ白きむめの咲くりにき士介　胡及

如裸者得衣

きぬ乃目や酒様〳〵あきなひの家

如商人得主

双六乃ひかりてよひろむつかし介

如子得母

竹くらしかけぬとらつくさけ介

如渡得船

月乃比津乃桜木きるまゝ乃

如病得醫

かすくしき清さたる付る山寺介

如暗得燈

秋乃私やおもゆるしき家紀よそ

神祇

古宮や雪ちりかゝる獅子頭　路宮

二月廿五日参詣て

ひさしきや飛ぬる乃月の梅　荷兮

志んしんと梅ちりかゝる庭火哉　同

宮守もあかりてことし神乃梅　亀洞

上下乃さかりしぬやうに神の梅　昌碧

蝶のかげとゝきりける梅乃中　鈴雪

御子らがねのあはれに梅の花　越人

岩がねくあまにさかる神の梅　舟泉

千代も志きる寺哉梅乃参　雨桐

門あそく梅乃瑞籬れかよかり　宗丈

絵馬かける人の後乃さむさ哉　亜客

花よ花よ書笛かさとえる社哉　随可

宮乃後川凌ぐるさむさ哉　李桃

神主の庭乃木竹乃中の住ちり　好葉

ほとゝぎす神楽の中を通りけり　重五

宮もり乃灯をかゝる火串哉　亀洞

破扇ちふみはかりけり　未学

川原の蓮疱ちまされる日暮哉　荷兮

こかしも里乃子殿く神輿哉　尚白

此月乃哀れぬ波にや　松芳

みをしあや祢宜乃さげたる油筒　落梧

若宮奉納

きしきしぬ家もめて神々楽　利皇

紅乃方と五條をまつ秋の神楽かな　飛水

鈴ニ康川　秋晴乃旅先神楽かな　昌碧

かつらきれ神中宮ゆるしの庭火かな　村俊

松枕や庇　様うつる燈籠かな　卜枝

祝

肩付といくよまでぬき毛のし
蓬莱乃早乃表よ　午文

賛喜も竹を飾りて見ゆるかな　亀丸

君乃代やさそくまれさまつるを　越人

末葉と紅葉もまれ神乃石　傘下

いききと鶴亀乃上に枝つたん　亀洞

千代乃秋にあやまちなしと家　日
ありしかるれめぐる人ゝ中ゝ越

先祝へ梅と松乃手竈　芭蕉

曠野集員外

紙の花を折にまかせて出しまれに命中
にありて歌かりしきさの人苦行に東
四方の禁りなく花のさかりにこれ
をかしけれは伊川田孝六のよしの山
あさましと出るかたを寫し入す文
麦喰し鳥と出てかゝれて
此句尾張乃野水子乃作にて芭蕉
翁の他にしをさかまさりけるにさう
比田此人君をうつして寫にて此句を
感さてむかしあつまりける人乃作
に虎乃韻絶せしまして追ひたる人

ありて雅色を寄しておきて深乃
ある文かしとさのまに夜のこと猿と
此句をさまなる三上戸乃飲をもえ
も實乃冬老杜乃こゝろなるや
雅一時の句をさへ見て

素堂

東をとりさとれ雅人に枯れ後も鳥
己の文人のまかりてと比けれ
しま三人用を夢もる吟して
月をきし掛けれ夢みけらる木
橋の路をあとしてまつ春乃夜に
朝乃あつかる秋くし昇より
門の石月借鷹乃やすらひて

鈍石
荷兮
越人
水

風乃月科を動秋乃雲　今
武士の気色山中もおく追し　人
志をりよつて鷲乃鳴音　舟
袋より傍の出すは箕乃ミ之　今
清かして湖ぞ水でまるまる雨　人
立と久きは松風垂まるる石乃端　舟
千々に行くは手紙　小山乃てら　今
晩きの乃一本桜も咲残り　人
あるとるもおすさき夕月欲紅　舟
露乃身は涙の雫ゆるる梅あ花　今
秋秋舟も来く恋人乃妻　人
明るまし　西も東も續の雲　水

さゆるかりそる科根の川舟　今
毛乃目のてらしとして笑雲り　人
家まよりしと　胴織うちまきて　水
ふらしとちの布の塩篁さ　今
拙つきしや人乃見るし棘　人
栢末乃脚氣の比乃つくくと　舟
さやくしるうこか光えつる　今
肉乃彩とり合まり辻ま樸　人
秋よ孕るより里乃個楠　舟
露しくれ歩轉よ出る音まけく　今
くれにと志のよ不破乃茶杷　人
如しこそる諫よ涙こぼるし　舟

火燵のくゞりてゐ乃あつきさし　兮
ろくまてりのなくと人の立ちを　人
ほせさしと出て池乃かへしとを　水
荻さく雲静もいまさ定らん　兮
狩く来ぬるさか晴れ紫　人
巻ら出て有月うしれやをされて　水
大根さきらく干らいそくし　兮

亀洞

遠浅や潟に出されし鯽しとを　蕉兮
はるれに世かるゝ湯乃あさき里　昌碧
のとかしや子さ洞に蓑を解く　母水
白足乃慣る茱萸さき乃紫

夕月乃雲の白さをうち渡し　丹泉
飛こゑ乃葉を振る引きせ　鴻雪
蕗の花ちるもきえしぬるを　年
一語ゑしして是も古錦　亀洞
茎乃ゑよすきしらる宜禄の鹿　蕉兮
取り紙は世に菜羊掌　昌碧
いつもの兮くて出てて蔵造　鴻雪
湯気きらきのゝ光むすむし　丹泉
涼しやし菱りてらる川乃端　母水
ちらかされしやけ行舟　蕉兮
秋風に女車乃髪ゆるて　亀洞
袖くて由緒嬉路の法輪　鴻雪

時〳〵にものさへくはぬ花の暮　昌碧
八重山吹ハちらちらとよし　野水
日のいでやかハ何ぞん曙に　舟泉
むやむやけして土もしる如月　亀洞
向まくし実やる都のかれめにて　荷兮
垢離かく人乃先をのよ雷　昌碧
記不みて亍奥乃加減覚えけり　釣雪
おもしろくするそのわけそく　舟泉
むく新にかいひつめく赤膳に　野水
門をまかり茄子よぶこゑ　荷兮
そうらくらして足軽町乃藪添し　亀洞
秋のよ逢そりおれもきゝ派　釣雪

盃もいとをとこらの下戸の身　昌碧
やすこわ秋乃やさしあるをら　野水
つくろうも杉ある寮の窓　舟泉
そこに月をゆき安房の小湊　亀洞
夜の日やえる百姓の照貝て　荷兮
桐乃せつるを入しまいゆり　昌碧
人ある脈見せてねるもの　釣雪
ついしらてしる雁精進　野水
気しき饂のくさ多り無乃水　舟泉
柳のこころ乃かまきりの卵　李芳
夕暮乃條拘よるそ久しそん　冬文

きらつきやうまに見ゆる月影 荷兮
秋草のとくにも高き伏見ごろ 松芳
弓ひきたらる勝手桜くらく 舟泉
夕日も赤き捨てらるゝ出る 荷兮
あみて冷の井の水のえし 冬文
大嵐の後の家をとり出ぬく 舟泉
涙つんせしとうら恐しくして 松芳
京へのぼりにしてを落つるあり 冬文
酒の中に掲げらく よみ川 荷兮
幾年頃何れもせんはしき 松芳
たまわく初唄の絵を先にさる 舟泉
おふくろもうちあけるはなの奥 荷兮

肩の縁や庵を弁の雲 冬文
村はなを杉しつまれ風 舟泉
穀縁とりりく糸息の人 松芳
隣辰も入道の声八つとる 冬文
十日のきく乃杉しまきるく 荷兮
山里の秋悲しく生鯛 松芳
鳥ゐかくとるやさむ 舟泉
さえかしくあうお渡る月の影 荷兮
馬乃しとをれてこるのいえく 冬文
さひしさを東井乃家の兵雨 舟泉
定めるつく蕎麦あつくゆ 松芳
つくりと綿さる宵のこしみまく 冬文

暁ふかく蟋蟀よむ　荷兮
けしの花とくちらんとするまもあり　松芳
味噌するをとの隣さハかし　亘泉
黄昏乃門さしけるに薪ふ　荷兮
泪かしよあくるまでねず　冬文
去年の頭赤貝くさくておかしく兒　亘泉
都乃人にうらるゝ蛍旅しもち　松芳
きさらきや瀑布を背に松をこえて　冬文
そろ〳〵西へきて山口乃家　荷兮
忍しきれ得ぬ人の形もあり　荷兮
雨乃ふる夜の手まくらや戸乃口　世水

引すてし車ハ琵琶乃かさりそ　同
あしたうれしも人のうしかれ　荷兮
身の秋旅の恋をさそいつゝ　同
一夜かりし宿のきぬきぬ　世水
初あらしまつせ寮乃墻を丈　水
菜畑ふむなとくゝりけるり　兮
土肥をとりしより来てあく　仝
市中刈しれ稲を抱う声　水
通路のついてうこけて遁せり　仝
六條にありし裏乃うハきをさ　兮
代々にゆるさしゝ詩歌そ　仝
議一番つよ舞一節　水

月乃紀学はらまいつてくそ并　仝
花咲かしんやあめ子事業　兮
天仙蓼は冷食あきし表の墨　仝
うきるほうけよ宵陰乃中　水
たく人しるありて花ゆゑらさとも　仝
女せるしき酒つけてやる　兮
弱乃やと眺めを後流り六年髪　水
秋乃あらしは青海瑠璃　兮
張そうくもよそれほのにしせう文遠　水
八日乃月乃ささきいつるまゝく　兮
山乃端よ松し　桃しの曲もまず　水
まつきるあをてふろくしとさる　兮

引すてし車ハ琵琶乃かさ〻きて　旧
あしきれくも人のしかかれ　蕉
月の秋旅の志さまいつるゝ　旧
一荷ふみし露のきうけ　毋水
初あししつせ丸寮乃場を丸　水
菓畑うむなくとくうけるり　兮
土肥をとりしまうきし紫あく　仝
下判御して神を抱う妻　水
通路のついそうさけて逃かゝり　仝
六條よあらし悲乃うハまさ　兮
代まらぬともとし清於あて　仝
滾一　要く三　艘一　菩卯一　水

月乃秋営に滞りにいてゝ今年非
花咲かりし石よりの宿わ未
天仙蓼に冷倉おはしまの書
うきをる〇みけるに宵経乃中
たく人しあつて気細うちをそ
夕せらしき治つらてやる
弱乃やと賑わを往謹りふ六早受
秋乃わらしくに菁澤稲禱
見てらくもまくれめにまき見し望見之謡
八日乃月乃ゑとさとつるまえく
山乃端よ松と桃とのかをと宴
まつさるしこふるくしとさる。

全字全水全字水字水字水字

里すきしまや猿らけり斗引むきん
太鼓たくきまに濱子の知るゝ
こゝろしし森ぐる来賃のるま枕
衆らくく乃ちくきと無年まわる
黒みるもおゝしぬ哉て一二年
庇をつうゝく紀あほうくらまめ留
三すのおはむつると出子る
供奉乃草鞋を谷へうちさることと
脱くや小塩大原撰縁の花
人物めるけゝ乃川岸

肉さしの和る氏久八篁乃果まおく〆る

全孟字水全字全孟全菴

拾ひしさに柄をさしてやらん團扇
呆瀬法師乃ありさまなしかる夏の
秋乃森ある所を絵にやれつきぬ
肉に柄をさしてくるまき團哉
牧乃杉るとりり夜の秋の蔽
とつくりを誰らつ並へてころかん
杉母いかりをみきこの世ぬきの雲
忘ゐ杉つらく杉とへてよりかくて
使乃者に返しのやうのおとされ
あれこれて猫乃子を遊るさまくは
としさくるまくへ河やさしけり
まこそ十くのの軸をせく挑とらん

越人　笑下　同　人　同　笑　下　同

ちゝ杉りとけよ浣たてしけ良
大勢乃人に法華をとゝあされて
有のタ月訪齋澠う川
皆ふ柄小文字の粉の先焼し
秋ののりしきや畑みる杏か
りの中ゐいつり世世を背くへき
麻布して書をみやよの仲の白户
花乃かるやうてくへるゐさる飯荷つ
義の初乃こてくき春風
うち霧く浦の昔乃汲守屋よ
肉へ入りて下すしかゆる大
碑さやんのあの飲むき此まれや

人　同　下　同　人　同　下　同　人　同　下　同

ゐてつくる雨の降出し　人
歌合独は鎌倉まかりても　旧
すゝき秋土乃ゝ家ちかひけり　下
灯甚乃油こほして押くし　旧
白玉にかよはせたまはりしと鬼　人
ふく風に菊のにほふ夏のふるくと　旧
半ハこもれ花や月乃秋　下
おもしろき月にうる龍の歌に似て　旧
人の傳ふハふる川こもれし　人
にきはしく瓜や茄子を荷ひ出　下
千代参る乃ころ人町中　人
松かけに小法乃寺の鐘付て　下

はな月まゝや家僕し　人
百姓もいそく所に長者大　下
田楽きれく探湯しき　人

深川の夜

雁かねもしつかにきけはからひすや　越人
酒しゐならふこの比の月　芭蕉
藤はかま誰窮屈にめてつらん　仝
理をはなれたる秋のゆふくれ　越人
瓢簞乃大きさ五石ほとなりや　仝
風にふかれて帰る市人　芭蕉
なに事も長安ハ是名利の地　仝

医のおほきこそ目くるしけれ　越人
いそがしと師走の空に立出て　芭蕉
ひとりも世話やく寺の跡とり　越人
此里に古き玄蕃の名をつたへ　芭蕉
足結もとかせぬ雨のあけぼの　越人
きぬぎぬやあまりかぼそくあてやかに　芭蕉
かぜひきたまふ声のうつくし　越人
手もつかず昼の御膳もすべりきぬ　芭蕉
物いそくさき舟路なりけり　越人
月と花比良の高根を北にして　芭蕉
雲雀さへづるころの肌ぬぎ　越人
破れ戸の釘うち付る春の末　仝

よんきをさかしき雲のひきいりて　蕉
家なくて服紗につゝむ十寸鏡　人
ものおもひゐる神子のおもかげ　蕉
人去ていまだ法坐の匂ひける　人
初瀬に籠る堂の片隅　蕉
あしきれ弟のあとに元服する　人
袴績のさしけ露八つぼれく　蕉
あやゆくに姉と妹の夕なかめ　人
河の雲をたゝみあげてむぞ　蕉
此月のそれの里で消されし　人
碪も遠く鐘よいのかり　蕉
秋の田をからせぬ公事の長ひきて　人

さいしなりし文字関なくる　蕉
いかめしく尾鹿乃末葉や　人
猪逃まとふ子乃寝覚ひなき　蕉
秋の比諸ら義きもしぬかし　人
田なしとりつく膝きくち　其

公卿に佳なく被て来る人の跡つけさま
若気ま我らの文や天津丁　其角
三あさの月見雲なりけり　越人
菊萩の庭まゝ乗をひらりて　仝
郷さくもとらし筆をれるなる　角
泥くさく継ならみさる夜哉　仝

歯ききりまさくなからつよのつき　人
順くとくる涙まなさよそしまりて　仝
静浄前子舞をきとめる　角
空蝉の離魂の姚乃ねをろし現　仝
あしなおりける今二万両　人
いとあしきてを他人ともら所背きとり　仝
やけとなおとそてうらしつゝよるふ　角
酒熟さ耳なつきしるさし純人さと　仝
魚つきもつしぬ月の江の舟　人
そせいろの笛子ハ浅黄な紋の書　仝
ねとさしとる草乃一箱　角
饅頭をくれさき神さつきそれる　仝

うき世につけて死ぬる人は損　人
西王母東方朔も目には見えん　仝
よしや鸚鵡の舌乃かしこき　角
あちきなや戸にはさまるゝ衣の裏　仝
恋の鞁とも云ゆふれとのまん　人
やれハ寝衣の深くさを捨ちぎりそ　仝
茶つくしまうき師走しり　角
夕暮宿乃あさまに後のそり　仝
いくつの堂を蒔ふ強力　人
究りゆく塵くちをもしむ桝椛　仝
ひいきうさりを修行の八朔　角
満月を不断さしかけて流れる夜　仝

念者法師は秋のあはれせ　人
わすられきまうきしき郎の子雲雀　仝
ちりよそりゆる宗祇みゆめに　角
ひとさは元会の法師ほろびて　仝
とのきくまゝぬ馬士の亀より　人
花の香にあさつき膳をこうや　仝
むしろふなへき喚續乃妻　仝
ふたもとし新居八人の碑かゝき　嵐雪
秋うそうきしいつも濁蟬　越人
肩の着書を引ちぎりまぬて　仝
お面茶の草をけまけり　言

たらみあひし牧よまりしらぬ里の宮　仝
川越られて堤下のこゝち　人
疱瘡負の遠よするかく鬱の白き　仝
唱哥八志らんと声をうりやる　吉
ふところみるそ手みれくのさき雲よ　月
後そひよへくのよきそ手くきさき　越
ら彩まくも沖あるするきさき　人
行燈ともとく欠へる浪人　嵐
羌褐を濡ようて一ツ脱　吉
喰白き鬢そる宵の月新　越
志らの群て泣みる女　宮　人
つき茶の医者乃後姿や　吉

ちる萩よ自らくされよ世咄　越
よふて言しては行きらけん　人
稲妻やこゝしの秋る桐のはまは　鶴水
日のみしりきくまそ乃鉋鞄　落梧
山川や鶴の啼夠をきゝけん　仝
勝を遠かりつんるへりうとし　由秀
れ冊みさまよ押合月よ草臥　月
あつらし　世ち檀の萩　落梧
川越乃歩よさうれ行秋の雨　水
ぬかつく犢る葩のきしてあさき　梧
りのせこそわりなくうられ椽の下　水

とかきおろし此のうきくひ　桔
寒る松乃湯をむかしと水飲て　水
こころみ都そ末住居る僧　桔
峯乃雲おちふわるをつくねらる　水
旅はしれうちのん寺羅さ　桔
京にて重子なれとそくも一文ま　水
下戸八皆いく月のねかゝきさ　桔
耳や歯やとうても花の頃ならを　水
見え笑させるりよの御手　桔
いつやしも曇ぬ此頃くに　同
山伏住て人まつ併ありし　水
ちらくしくらさひぬけるる車　桔

挑灯ともして住関さえゝ纏　水
你すと派らん鬢を振おろし　桔
志らく梅とつくぬつれなき　水
そうしとやうる馬すうきのせく　桔
りふ府中併飴福ふうまわ　水
雨やしく雲のちらさる面白や　桔
御ちうろを御の遊ろ　水
韵あうく両ろさかれみ十日　同
寂しまよ秋を女夫居るまり　桔
ちらを上るをは老さるしやまし　水
黍わてくやれいわしへの溜　仝
知てもの手魚備るこん坊ま　桔

渡りより西を先へつんくしくる　因
来る乃ちらりり孫かえまゐし　水
秋のましらへを雲雀鳴や　格
一里乃岸藪まつるかな　一井
かきつひの先の籬ぬる鶉　萬彈
さきくさや西事を引ぬ後ろん　胡及
眉右そふれ酒まよふ人　長虹
夕月の入さは早き譲さハ　萬彈
たけらに鮒をつくこゑむ秋　一井
里深く顔ある二三日　長虹
寝目り妻に知られて憂　胡及

同しれても涙よ梅のころかくき　一井
着縫しきくく切かしく文　萬彈
うらくと森苑かりに湯をさき　胡及
ころゆく歳末の銭乃香御　長西
なかふ月くよそをあひてハうち若日　萬彈
蛤よくハらふ女中ゟ剃　一井
浦風に脛吹まくる肩深し　長虹
みるもかしこき紀路の魂祀　胡及
若者のさーし矢射くれる外の詠　一井
恭くも香り遠さかりかり　萬彈
はるのくれあつまくさ睦しん　胡及
夜のまの綿乃袷よ薄らく　長虹

くらかしまきる内かさくてまと溪　嵐彈
ふる霧なしてある坂道を踏かり　一井
木くさこにあるうかし松の枝　長虹
稗よくしる人しし乃奥　胡及
此年よわりて食のほそくなりさ　嵐彈
湯くうつもせきそるつの森入月　一井
萩ゝるたまく漂ふ乃浪のうこてさきさき　胡及
こきくえ筋かうま志ほむ鮫のく　長虹
湯の後入道めくま乃えるかりよ　嵐彈
衣引かゝる人乃よく音　一井
毒なりと瓜一きれも喰ぬなし　長虹
序風多からくるる気白雨　胡及

板屋さへく諸がなき庭乃内　一井
そゝ日乃あけゝる星まき屋丸　嵐彈
ぬくくしと日足乃見えぬ花曇　長虹
見りことなりきとことさつくし　胡及

抑これらの道をふかく千金の浪花
身はそ崑崙山の玉鉢に及ばずもあらんかぎる
みなみなこれは いさゝか錦をさく身に分をわきまへ
すこしも浦にもあらんとする秋風洲のくふく
つとめ学れおもふれどもそ しあまりそいふとして
上海浦の さらにみてときるさきに利りし志
うへありて宝庫ゆるまそのふうにたるをさりふる
豊んをとくまん おとんいふこのかくふるふるあふ数
無子桜の雪をまふめるし 滴ふれ 営をせむとぬ
第人にも加くそ御繁昌仕りまして 御

乃とゑおれよりもかくめんきなかくも
このたひ俳かし翁られしを行しつゝめて
ゆかりのこともいふまじきものよりて
おのつからあきもさくちうる人して この
ことはりもふるの出拘る七部乃ふるき
を一ちれとなしてあつめさくその奥
俳を志るしめんとせちなりたのまれ
大鵬館主人にいふ
嘉永三戌のとし
長月乃比

俳諧書籍目録

橘仙堂蔵版

- 俳諧七部集 冬の日 春の日 あらの 猿みの 続猿みの 炭俵 ひさご 半紙本七冊
- 同続七部集 深川集 有磯海 小文庫 卯辰集 千鳥掛 負おほひ 続並やと 小本二冊
- 其角七部集 虚栗 新山家 花摘 萩の露 焦尾琴 雑談集 続虚栗 小本二冊
- 蕪村七部集 其雪影 明烏 一夜四歌仙 桃李 続明烏 五車反古 花鳥篇 小本二冊
- 芭蕉翁発句集 小本二冊
- 葛の松原 支考選 一冊
- 続五論 同 一冊
- [illegible]の細道 翁奥羽紀行 去来本 一冊
- 笈の小文 翁庵の記 一冊
- 枯尾花 翁追善 二冊

俳諧氐尓波抄　北越大人口授　有樋識　全部六冊
古今集の句々ぞ手尓波を新数しくそて尓波の義をくハしく注をと

類題発句集　蓼太選　五冊

新類題発句集　日選　五冊

華実年浪草　十五冊

新百韻　元禄十一　支考　一冊

字引 合類大節用集　文字土示和漢乃注を委しく加る　十三冊

俳陽如芭所学行先生著
芭蕉翁吉郷傳　有国校
翁初冠の比より晩年に到るまでの行状を委しく記し伊陽に行る所の附合文通句論四方の為きに校て注をあらむ　二冊

安永三年甲午十一月發刻
文化五年戊辰十一月再刻

皇都書舗
野田治兵衛
浦井徳右衛門
筒井庄兵衛